

◇ 木野雅之 (ヴァイオリン) Masayuki Kino, Violin

桐朋学園を経て、1982年ロンドンのギルドホール音楽院に学び、名匠イブラ・ニーマン教授に師事する。音楽院卒業後、ナタン・ミルシュタイン、ルツジェーロ・リッチ、イヴリー・ギトリス等3人の巨匠に師事し研鑽を積む。1984年、ロンドンで開催されたカール・フレッシュ国際ヴァイオリン・コンクールや、85年パリでのメニューイン国際コンクールで、サロン音楽特別賞を受賞、87年には『ロイヤルオーケストラ協会シルバメタル』(英国)を授与されロンドン記念演奏会を行った。

英国を拠点にコンサート活動を行っており、ロイヤル・フィル、ベルリン響、ポーランド国立放送響、モスクワ放送響など数多くのオーケストラと共演。また、サンレモ、オールドバラ等国際音楽祭への参加も多く、RTSI(スイス)のテレビ・ラジオに出演、海外での活躍もさかに行われている。名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターを経て、93年4月より日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターに、02年7月よりソロ・コンサートマスターに就任。

2001年にコンサート「パガニーニの魅力」を開催、テレビ朝日ブロードバンド・ライブサイトにて放映された。2003年パガニーニ奇想曲第25番「別れの奇想曲」を日本初演及び録音、7月にはフランス・カシス音楽祭にてイヴリー・ギトリス、ルツジェーロ・リッチ、マルタ・アルゲリッチと共演。

オクタヴィア、サウンド&ミュージック・クリエーション他より多数のCD、DVDが発売されており、いずれも高い評価を得ている。

2013年より東京音楽大学教授に就任。また桐朋学園大学、武蔵野音楽大学にても後進の指導にあたっている。

使用楽器は恩師ルツジェーロ・リッチから譲り受けた1776年製ロレンツォ・ストリオーニ。

◇ 藤本史子 (ピアノ) Fumiko Fujimoto, Piano

九州女学院高校(現ルーテル学院)を経て、国立音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを、吉川由三子、小池和子の両氏に師事。これまでに、幾多の音楽コンクールで入賞し、2008年、国際ピアノ伴奏コンクール優勝。2009年、日本ピアノ歌曲伴奏コンクール優勝。

2006年、スイスレンク国際音楽アカデミーにて、ソロ、室内楽をアドリアン・コックスに師事し、デュオで共演。〈エネルギー推進力にみなぎり、レンジの広い、デュナーミク、表情豊かに歌うフレーズ等、コックスと一体となった起伏が、まさに表現を実現させていた〉〈ムジカノーバより〉と好評を博す。

NHK交響楽団、九州交響楽団のコンサートマスターや首席、次席奏者、東京ベートーヴェンカルテット、U. ダンホーファー(vn)、A. スコッチチ(vc)、R. ラッコ(vc)、D. タラス(cl)、ウィーンラズモフスキー四重奏団をはじめとする、国内外の著名な演奏家や声楽家と共演中。

現在、フリーのピアニストとして、室内楽、伴奏法を上田晴子氏に師事しつつ、主に日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター木野雅之氏、九州交響楽団首席コントラバス奏者深澤功氏の伴奏者として全国各地で活躍しており、両氏とのCD、DVDもリリース。又、スコットランドDG地球救援音楽祭、球磨川音楽祭、みおつくし音楽祭、八女おりなす音楽祭等にも出演。様々なジャンルのコンサートを企画、出演し精力的に活動中。

◆ プログラム・ノート

■イザイ:悲劇的な詩



ベルギーが生んだ偉大なヴァイオリニスト、ウージェヌ・オギュスト・イザイ(1858~1931)は作曲家としても優れた作品を残しており、中でも6曲の「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ」はよく知られている。「悲劇的な詩」は1892年から1893年にかけて作曲された元はヴァイオリンと管弦楽のための作品。気品と悲愴感たどる美しいヴァイオリンの旋律から始まり、やがて壮大なクライマックスを築きながら最後は静かに終息へと向かって行く。作品はフォーレに献呈されている。

■ルクー:ヴァイオリン・ソナタ ト長調



わずか24才という若さでこの世を去った、ベルギーの天才作曲家ギョーム・ルクー(1870~1894)が残した傑作にして最も有名な作品。曲は彼の作品を聴いて感銘を受けたイザイの依頼により書かれ、初演もイザイ夫妻によって行われた。みずみずしい叙情、若々しい情熱とロマンティシズムに溢れながら若書きとは思えない完成度の高いこの名作はイザイの演奏により各地で好評を博した。ルクーの師であったフランクのソナタと並ぶ傑作と評されながら演奏される機会の少ない隠れた名曲。

■スコット:タラハシー組曲

シリル・スコット(1879~1970)はイギリスのピアノ奏者、作曲家にして文筆家。東洋哲学や神智学に興味を持ち、ピアノ曲を中心に、簡素な様式の描写音楽や東洋的題材の小品を書いている他、著作物も数多く残している。タラハシー組曲は1910年に書かれたヴァイオリンとピアノのための作品。もの憂い曲想が美しい知れぬノスタルジーを惹き起こす叙情的な作品。

■ショパン(リビンスキ編):ノクターン第1番 変ロ短調 作品9-1

フレデリック・ショパン(1810~1849)が折に触れて作曲し続けたノクターンの中で、最初に出版された曲集の第1曲を飾る作品。1831年の作曲で、カミユ・ブレイエル夫人に献呈されている。いくつかのノクターン同様、その美しい旋律は、後年ヴァイオリンやチェロ、声楽用に編曲され愛され続けている。編曲のカロル・リビンスキ(1790~1861)は「ポーランドのパガニーニ」の異名をとったヴァイオリンの名手で、パガニーニとも親交があり、それぞれお互いの曲を献呈し合っている。

■ロッシニ(カステルヌオーヴォ=テデスコ編):

フィガロ〜歌劇「セビリヤの理髪師」より

ジョアキーノ・ロッシニ(1792~1868)の傑作オペラ「セビリヤの理髪師」の第1幕第1場でフィガロが歌う陽気なアリア「おいらは町の人気者(なんでも屋の歌)」をもとにイタリアの作曲家マリオ・カステルヌオーヴォ=テデスコ(1895~1968)が編曲し、ハイフェッツに捧げた作品。テデスコは、第2次大戦前にイタリアを離れて渡米、ハイフェッツの援助のもと映画音楽を手がけ約200本もの映画に楽曲を提供した。ハイフェッツは、しばしばこの曲で演奏会をしめくくったと言われている。

■グラッセ:波の戯れ

エドウィン・グラッセ(1884~1954)はアメリカのヴァイオリン奏者、作曲家。幼少時から盲目であった。作曲家としてはヴァイオリンと管弦楽のために書かれた「アメリカ幻想曲」などいくつかの作品を残している。「波の戯れ」は、海辺を行き来する波のさざめきを思わせる曲想が印象的なヴァイオリンとピアノのための小品で、ハイフェッツが好んでアンコール・ピースとして取り上げた。

■エンゲル(ジンバリスト編曲):海の貝殻

カール・エンゲル(1883~1994)はドイツ系アメリカの音楽学者、作曲家で行政官も務めた人物。美しく静かで繊細なメロディが印象的なこの小品はエンゲルの代表作として知られ、多くのヴァイオリニストたちに愛奏されている。原曲はビューリッツアー賞を受賞したアメリカの女流詩人、エミー・ローウェルの詩による歌曲。編曲のエフレム・ジンバリスト(1889~1985)はロシア生まれでハイフェッツ、ミルシテインと同じくアウアー門下の名ヴァイオリニストでヴァイオリン用の編曲もいくつか手がけている。

■サラサーテ:「ファウスト」幻想曲



スペインのヴァイオリン奏者パブロ・デ・サラサーテ(1844~1908)は、その甘味で澄んだ音色と完璧な技巧で聴く者全てを魅了したと言われ、当時の大作作曲家たちもこぞ彼に作品を捧げている。サラサーテ自身もスペインの民謡や舞曲を盛り込んだヴァイオリン曲を残しており、この曲はフランス・オペラの第一人者グノーの代表作で、1859年にパリで初演されたオペラ「ファウスト」からアリアなどの旋律を選んでヴァイオリン演奏用に編曲した幻想曲。有名な第2幕のワルツによる終わりのクライマックスを迎えるまで、様々な名旋律と技巧に彩られた華麗な作品。